

**アフターコロナ**  
**企業の挑戦**  
**第2回**

# ニッチオンリーワン企業として 必要なものを必要なところに

橋本電子工業(株) 代表取締役社長 橋本 正敏氏 (三重)



橋本 正敏氏

長引く新型コロナウイルス感染症拡大で日本経済や地域経済にも大きな影響が出ています。そんな中でも、既存事業の見直しや新規事業への参入など果敢に挑む企業があります。新連載「アフターコロナ」企業の挑戦(第二回は橋本電子工業(株)橋本正敏代表取締役社長、三重同友会会員)の取り組みを紹介します。

橋本電子工業(株)橋本正敏代表取締役社長、三重同友会会員は、計測・制御機器、セキュリティ機器および医療機器の設計・製造・販売をする会社で、企画から設計、製造、販売、メンテナンスまで全工程を一括して自社で行っています。国内生産にこだわり、先端技術を使い「ニッチオンリーワン」の商品創出がモットーです。

橋本氏は、二十八歳の時に、当時勤めていた会社の工場閉鎖に伴って、社員投票で労働組合の執行委員長に選出され、再建プロセスのリーダーシップを執ることになってしまいました。厚い設計課の係長、夜は組合の活動という生活を三年間続けた結果、会社は赤字に転換しました。その後三年間管理職として勤務の後、三十四歳のときに一人で起業しました。その時代は下請企業が全盛期でありましたが、研究開発会社型・自律型企業をめざしました。

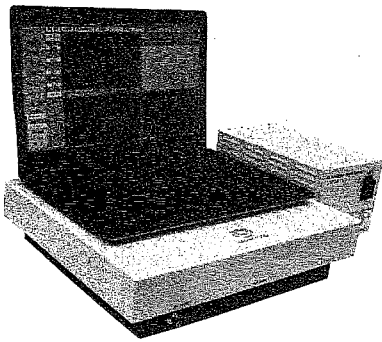
独立して間もなく、まだ社員が四、五名の会社ながら大型ホールの制御装置の発注を受けるなど、確かな技術力のもとで事業を拡大していきました。創業して七、八年が経ったころ、とある事業で成功し八千万円ほどの税金の支払いを抱えます。もちろん持ち合わせのお金がないので銀行に相談に行く「経営者なら、何をしているのか」と叱られてしまいました。それまで夜更の時間を削って、自分で考え、自分で作って、自分で売るというスタイルでしたが、この経験を機に自分で設計することなどをやめ、経営者としてマネージメントと人材育成に注力するようになりました。このころから同友会活動に積極的に参加しました。

また、創業当初から、地元企業や研究者、そして政府や地方公共団体を巻き込んだ研究会を作るなど、産学官連携の共同開発に積極的に取り組んでいきます。開発に成功するのは千件のうち三件ほど、というのが一般的な中で二十

件ほどの産学連携の中から、「FURUHATA」が「リボソーム自動製造装置」「ZFBプレート」などが実際に製品化され、販売されています。このうち「FURUHATA」がコロナ禍において脚光を浴びつつあります。新型コロナウイルスは、静脈や動脈に血栓を作ることが分かっており、その血栓により容体が急変し重症化しやすいと言われています。「FURUHATA」はその血栓を、頸動脈で検出する医療機器です。また、「リボソーム自動製造装置」により、血栓を溶解するリボソームを作る技術も開発済みです。この二つの装置によりコロナ禍における重症化を防ぐことが期待されます。

産学官連携について、中同協で企業連携推進連絡会の代表を務めたこともある橋本氏は、「成功した時ではなく、失敗したときにどう責任を取るのかを考えておくことが大事」と言いま

す。医療分野というニッチな市場では、納得して使ってもらうために、論文や実例などのしつかりとしたエビデンスが重要であり、



産学連携で製品化された「FURUHATA」

これを集めるのに時間とお金がかかります。しかし、決して大手のOEMに頼らず、あくまで自社ブランドを高め収益という経営者

としての強い決意があります。「人間は前向きにしか生きられない。いくら年をとっても夢と勇気を持つ」とが大事」と橋本氏は語ります。橋本氏の取り組みは、コロナ禍で暮らす多くの人々に夢と希望を与えます。